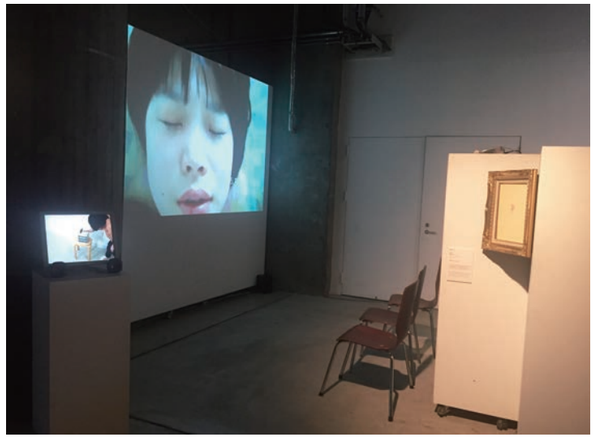
長　田　雛　子

ポートフォリオ

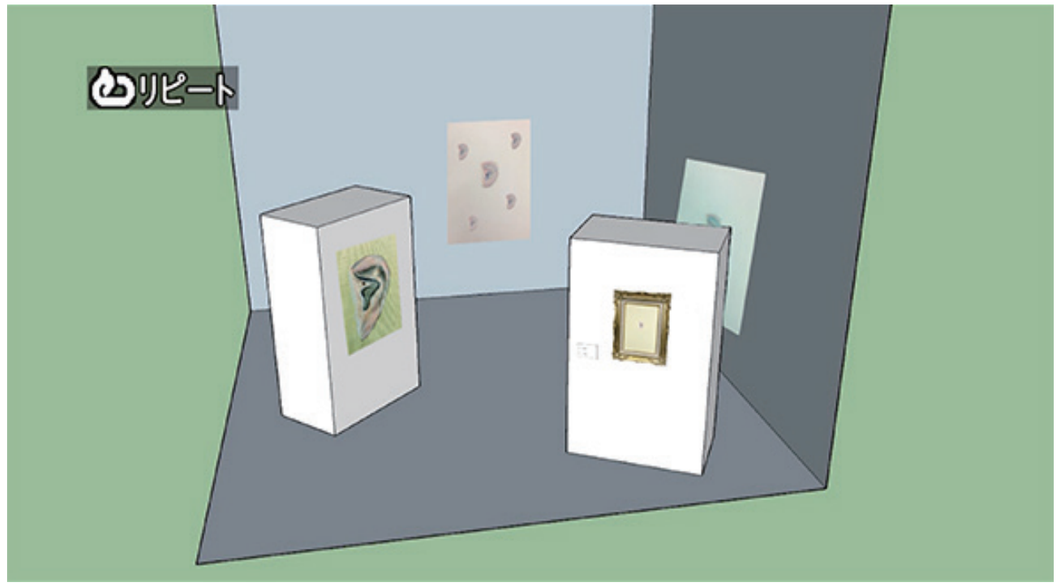


《地続きであるように》
インスタレーション　2018

イメージという言葉で言い表せる、個人の中に浮かぶ映像のようなもの。それをどう表現するかを探ることは、記憶や思い出とどう付き合うかを考えることでもある。心の内を外に出そうとすると編集は避けられない。その編集の作業を、私は制作と呼ぶ。
夢がきっかけとなって語られるエピソード、思い出の記録、街の中や日常生活を過ごす中で見る幻を捕らえること。
それぞれの行いはどこかでゆるく繋がっている。

＃トントン（看板）

＃夢の中の作品



「作品の夢」を見ることがある。
作品の試作をしていたり、構想を練っていたり、完成していたりする。
その中で、実際に作って見たいと思う夢があった。
展示会場で、私の作品が展示してある。
数カ所に額縁付きの絵が飾ってあって、全部に様々な耳が描かれている。
その中でも、一番最初に目につく耳の絵があり、
その絵の耳に向かって鑑賞者が「地続きであるように」とささやくと
絵の額縁の四辺が自動で開きだし、
中に入っている絵を持って帰れる、というものだった。
「地続きであるように」は作品全体のタイトルになっていた。
その絵の耳に向かってタイトルをささやけば絵が持って帰れる、
などの説明は会場内では特にしておらず、
何となくその行為をした人だけが、絵を持って帰れる。

漫画「にもつおくる」

今日のひなこさん

さーて今日のひなこさんは

ひなこです。
日中ふとクーラーをつけてみたらとっても快適で、いろいろ予定があったのに結構寝ました。
夏はやっぱり夕方くらいから動くのがちょうどいいですね。
さて8月3日は
バタートーストはおいしい
片付け全然終わらない
あやうく新品の本を買いそうになる
の3本です
じゃあ明日も宜しくお願いします。
じゃんけんぽん、うふふふふふ

ひなこです。
なかなか100円ショップに行けなくて悩んでたら、通りすがりにありました！しかも行くときに通っていた道で！見逃していただけなのにとっても幸せな気持ちです！
さて8月5日は
徒歩と普薬
展示、一つずつ潰し見ていく
そろそろ将来がヤバイ
の3本です。
じゃあ明日も宜しくお願いします。
じゃんけんぽん、うふふふふふ

ひなこです。
最近アイフォンのGPSが信用ならなくなってきたので、頑張って街中に目印を見つけて歩いていくようにしています。必要にかられて能力は身についていくのですね。
さて8月6日は
水素水は水か否か
体の中は宵だらけ
ホーリーマウンテン
の3本です。
じゃあ明日も宜しくお願いします。
じゃんけんぽん、うふふふふふ

ひなこです。
お腹の調子が悪い日は、じっとしながら亀を眺めます。亀は時々テレビを観ているような感じがします。本当に見ているのか…、それを見ながら私は寝ます。
さて8月11日は
oh!お尻から血が
山の日におっぱいの撮影
亀、エビで元気
の3本です。
じゃあ明日も宜しくお願いします。
じゃんけんぽん、うふふふふふ

ひなこです。
久々に料理を作って食べた気がします。鶏肉のトマト煮込み。本当は牛肉なんだけどお金が無いのでやめました。1時間煮込んだだけあって美味しかったです。
さて8月12日は
上野公園にブーバーいないじゃん
流れ続けるトイレの水
冷えている桃をゆっくり食べる夜
の3本です。
じゃあ明日も宜しくお願いします。
じゃんけんぽん、うふふふふふ

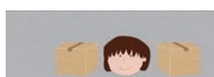
ひなこです。
友達の個展の空間に24時間いたら、最初よく分からなかった絵が、突然良い絵になりました、私の中で。パッと見と、長い時間をかけるのでは、知覚の体験が変わることもあるんですよね。
さて8月14日は
ワカメ、足元にビッシリ
クラゲのカニコーティング
何かの貝、採れたてで美味しい
の3本です。
じゃあ明日も宜しくお願いします。
じゃんけんぽん、うふふふふふ

ひなこです。
近所のコンビニの店員さんが怖い…。人でも遅いそうな、動物みたいな感じがする。
ゾンビが人間のふりをしているみたいにも見えます。避けていきたい。
さて8月15日は
ワッフル食べたくなる、食べないけど
スコップで坂を下る夢
悪魔のくだり
の3本です。
じゃあ明日も宜しくお願いします。
じゃんけんぽん、うふふふふふ

ひなこです。
外に出たら景色が妙に黄色い。風景の色は日によって移り変わるけど、映画として記録した風景の色はずっとその色のままです。その世界は永遠に同じ色で描かれるんですね。
さて8月16日は
人とストーリーが並行で進んでいく映画
はやく用事済ませたい
久しぶりに雨の音
の3本です。
じゃあ明日も宜しくお願いします。
じゃんけんぽん、うふふふふふ

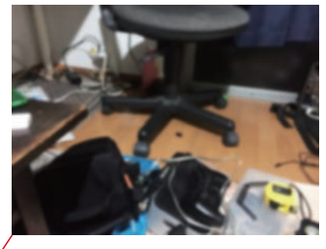
ひなこです。
私たちは面白いお話を欲している。彼も彼女もミミズもオケラも知識人も。始まりと過程と結末をどういう形にしていくのか、作り込めるところはたくさんあるなって感じです。

(2016.8.1-2016.10.26)



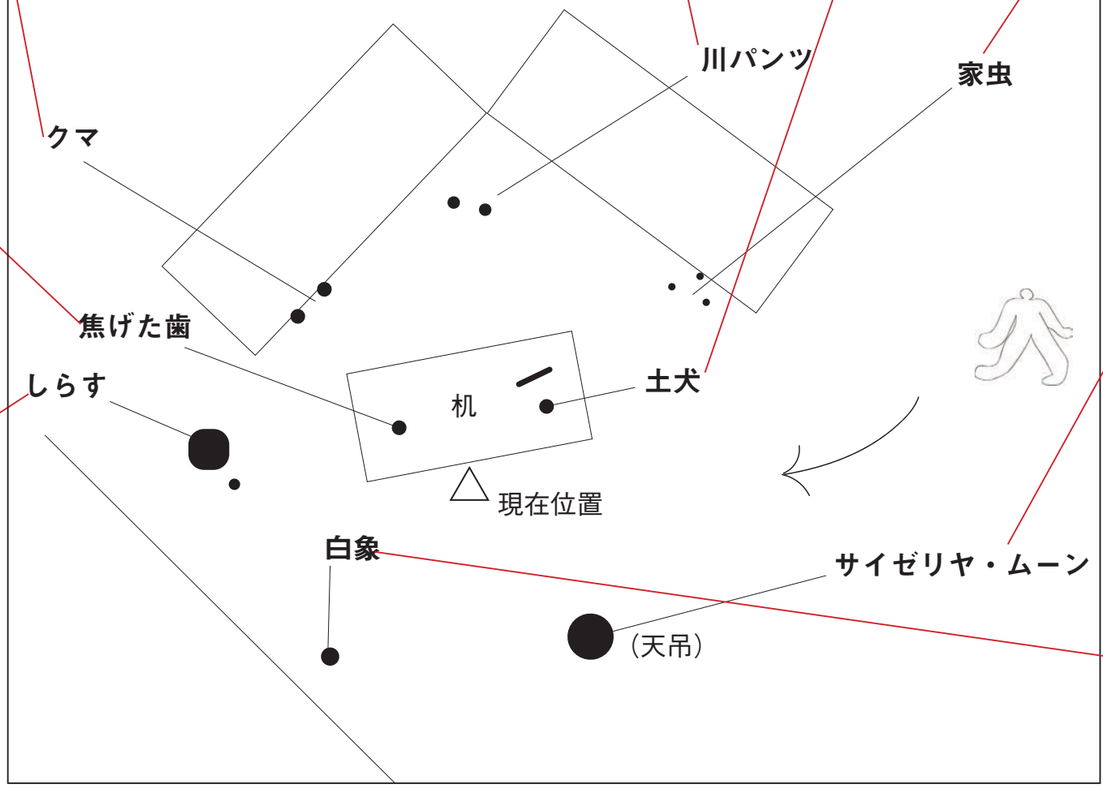
鳩が死んでいる
お母さん仕送りをくれる
ともちゃん落ち込む

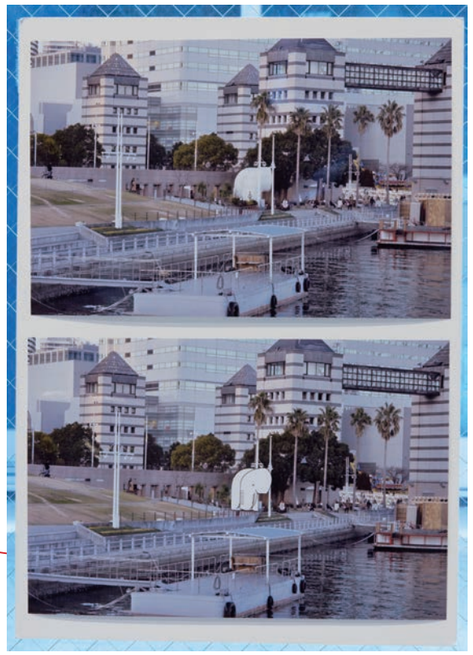
＃幻の世界

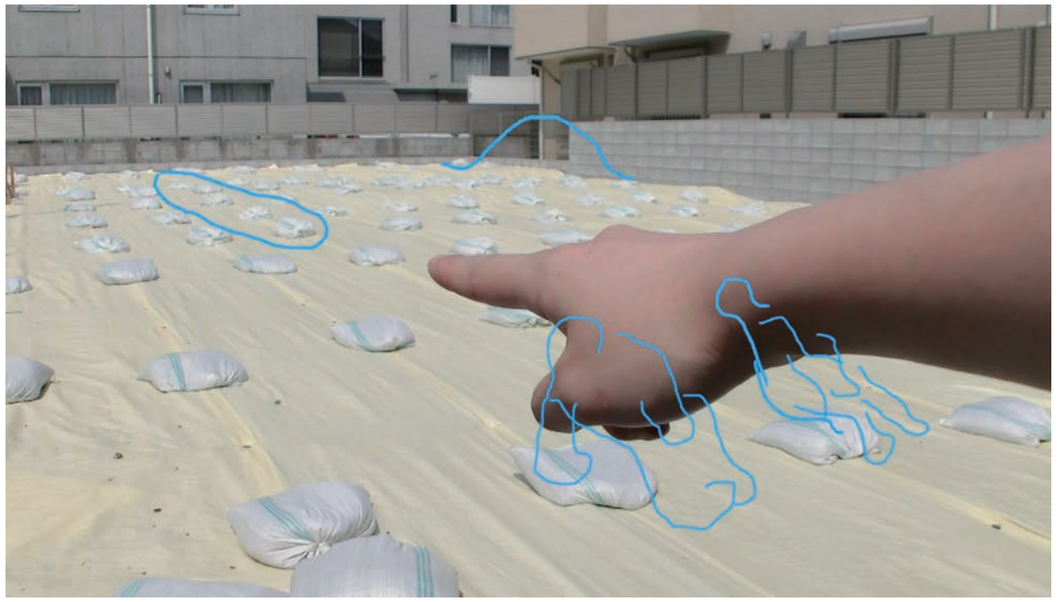


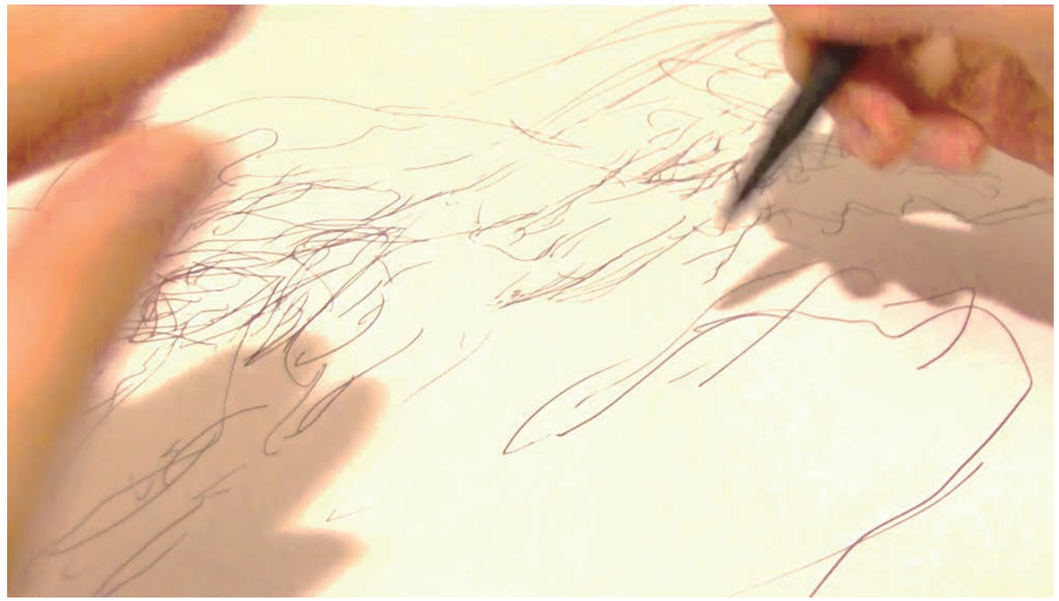
写真タイトルについて

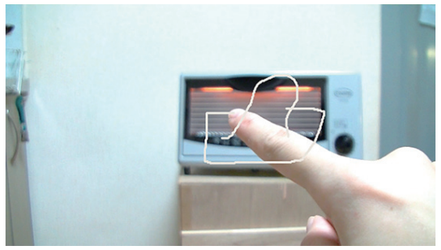
※黒丸の位置に写真が展示してあり、それぞれにタイトルがあります。

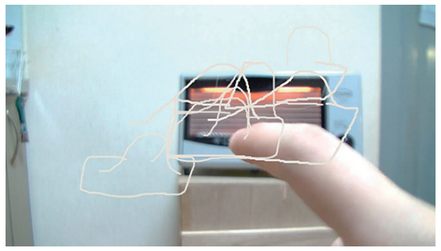












《空中に描いた絵は良い》

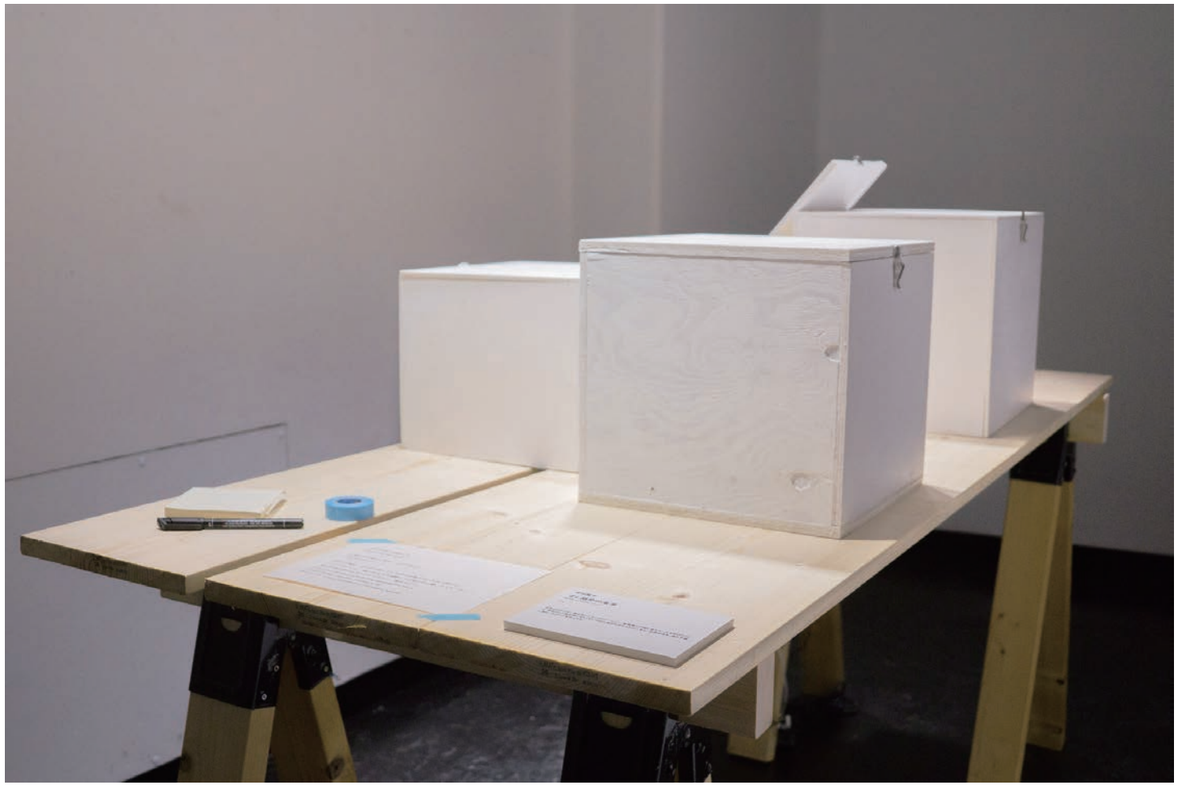
映像（3min） 2018

「紙ではなく虚空になんとなく描かれたドローイングには絵としての魅力がある」と仮定し、描かれた軌道を編集上でなぞっていく。

《シャドーのドローイン》

映像（5min） 2018

ペンを持った時、紙にかかる手の影を追って、それをなぞろうとするドローイングの記録。



某美術館にて、とある企画展を見に行った時のこと。

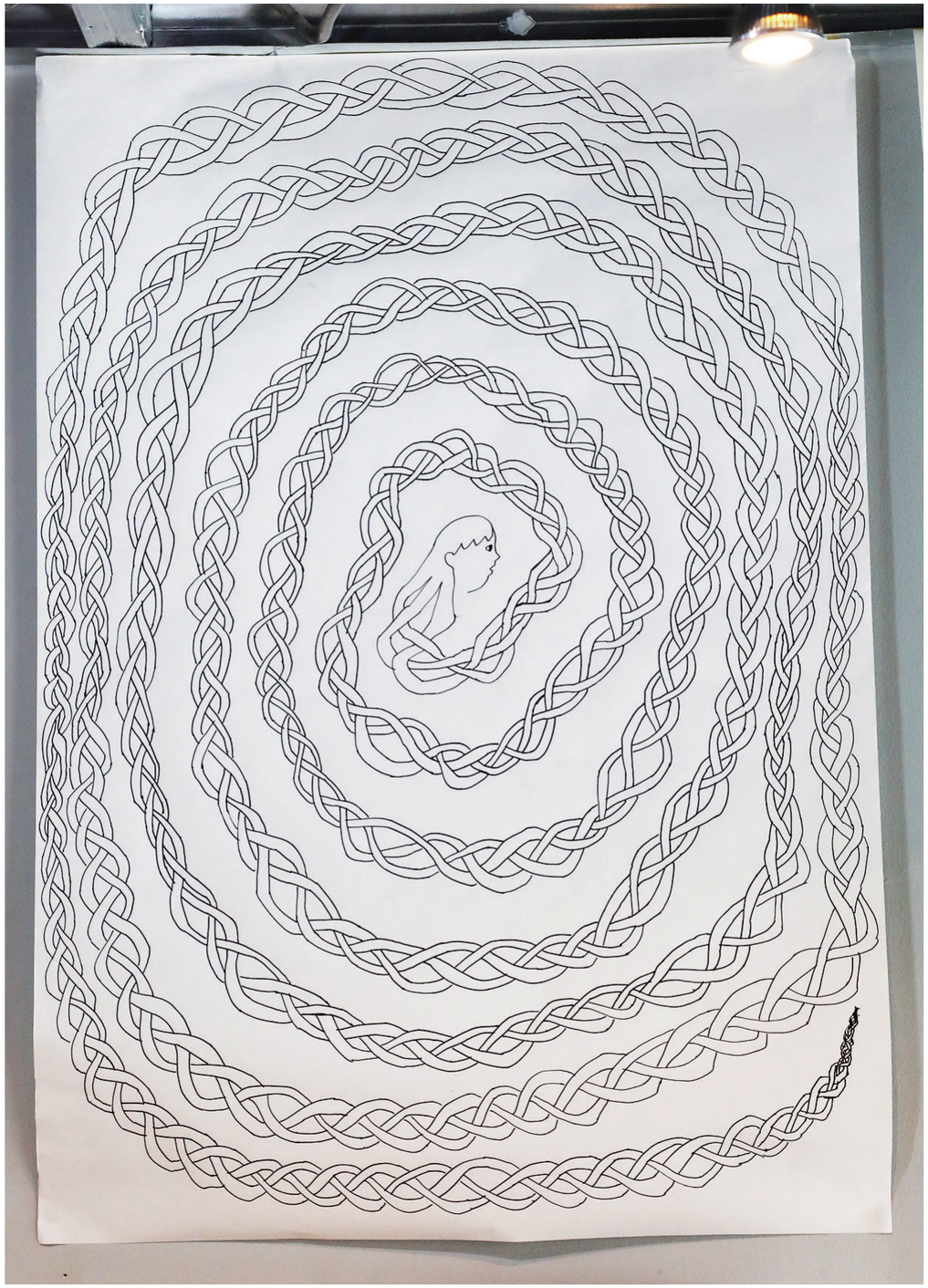
その時に出会った展示作品の一つについての話。
それは日用品だったか海の漂流物だったか、小物が 4 畳ほどの空間に点々と置かれているインスタレーションだった。 それ自体を良いとも悪いとも思わなかった、というかそこで何を思ったかは忘れた。 けれども、「ただ物が置かれている」空間において ここに置かれている物は別になんでもいいような気がしてしまった。

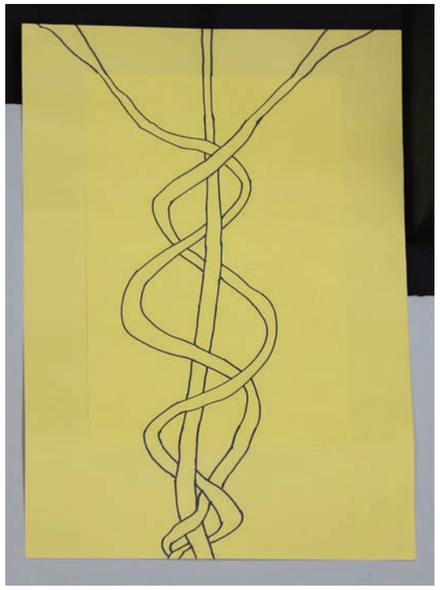
私はふとコートのポケットに入っていたくしゃくしゃのレシートを取り出し、
その展示空間の隅にそっとそれを置いた。誰も見ていなかった。
あのレシートはどうなっただろう。展示の巡回の人が気付いて取り除いてしまっただろうか、
それとも作品の一部として、それは残り続けただろうか。

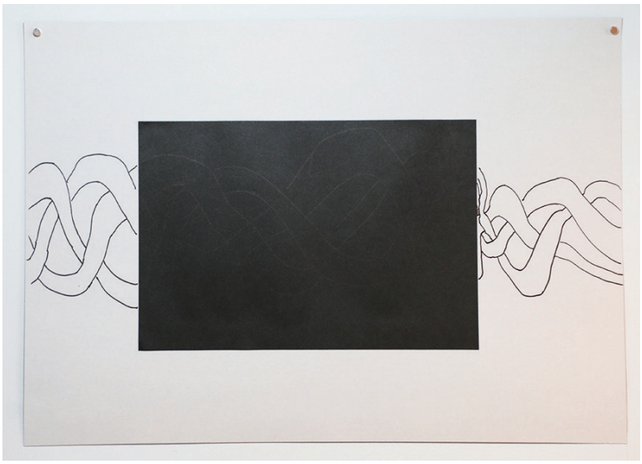
《すし詰めの未来》
インスタレーション　2017

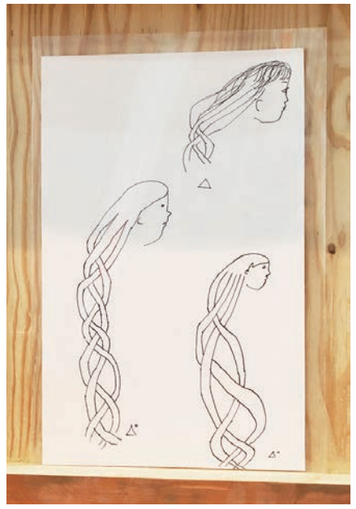
作品に鑑賞のためのルールを設け、来場者はそれに従い（あるいは従わずに）作品を見ることとなる。
ルールは以下の通り。

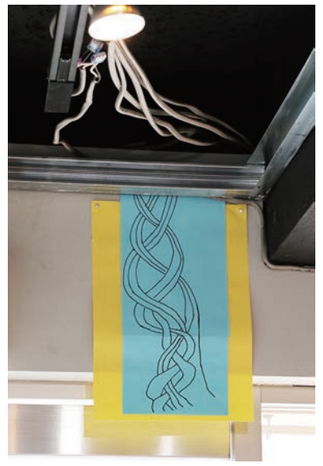
1. 箱の中身を想像する。
Image inside the boxes.
2. 箱の中を開けて見ることができる。
You can open it.
3. 開けた場合、あなたの持っている何かを箱の中に入れて閉じる。
（ゴミでもいいし、脇にあるメモ用紙にその場で何か書いて入れてもいい）
If you open the box put something belonging you into it.
(Trash, message, doodles,,, anything is ok)
箱の中身は持ち出すことができない。眺めるだけ。
But you can' t move anything out of the boxes. Just see.

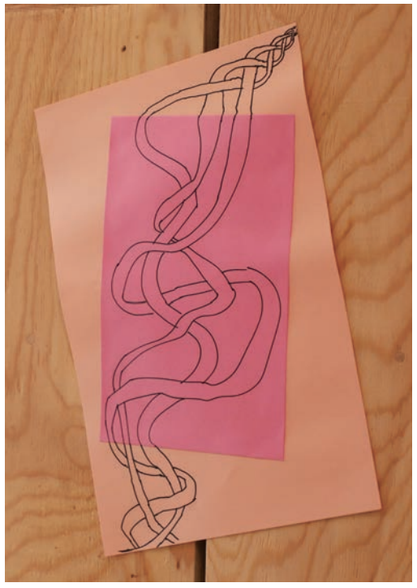


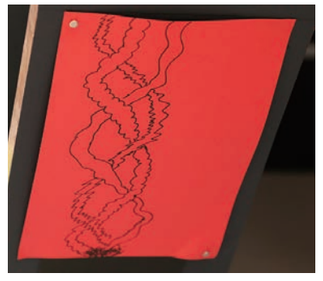


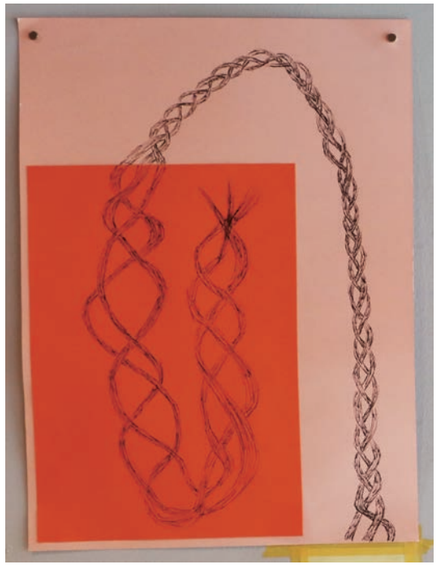


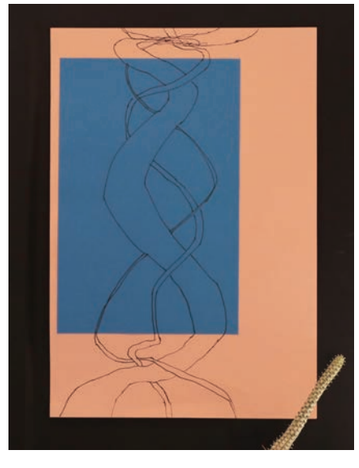






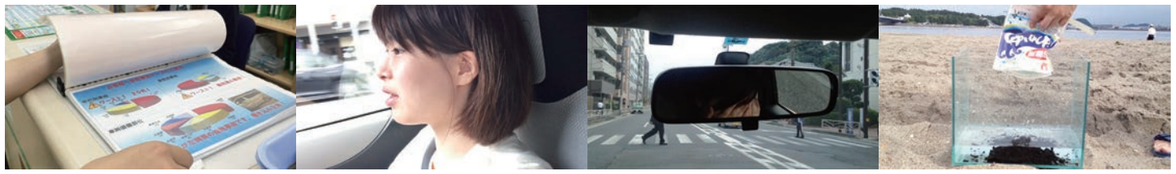






《みつあみの子どもたち》
ドローイング　2017

何かが「できない」ということ自体を絵の上に表示させる。三つ編みのやり方は指先が覚えていて、実際の髪の毛は自然に編むことができる。しかし平面上にその軌道を描こうとすると途端に複雑になり、上手く編むことができなくなる。編み方を辿りながら少しずつ練習を重ねていくドローイング。



《人として 自分として ワカメとして》
映像　2016

大人になるという精神的越境についてのロードムービー。車の運転をするという些細だが自分にとって恐ろしい行為を友人に見守られながら行い、そんな自分を乾燥わかめの縮こまりと重ね合わせた。

《ビデオの海を見つめて》
映像　2016

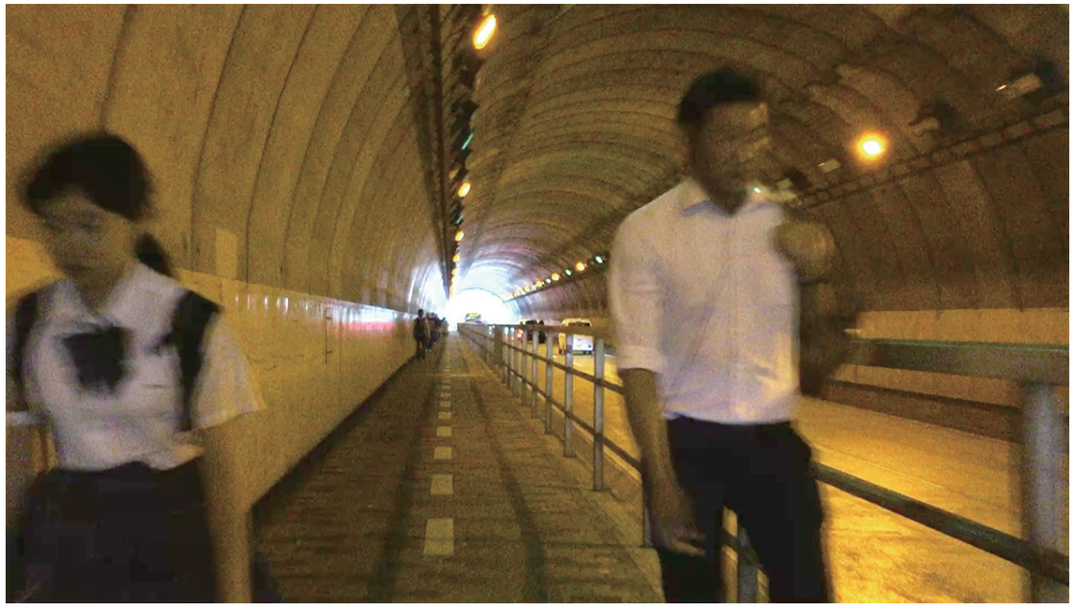
起床時に直前まで見ていた夢の内容を喋り、ビデオカメラに録画する行為をライフワークとして行い、さらにそれらの夢の語りを自身で編集していく。夢を語るという行為は、当事者以外には退屈なものだ。しかし夢は眠っている最中、確かに見た映像だ。それがどうすれば伝わるか。そしていくら真実味があるように見えても、夢は語られた時点でその語り手によって編集が施されている。それをさらに映像として編集していくことで何か違う物語を立ち上げようとする。

《セキュリティ》
映像　2016

光は熱いので、電球が張り巡らされた通路を作っておけばセキュリティ対策になる。

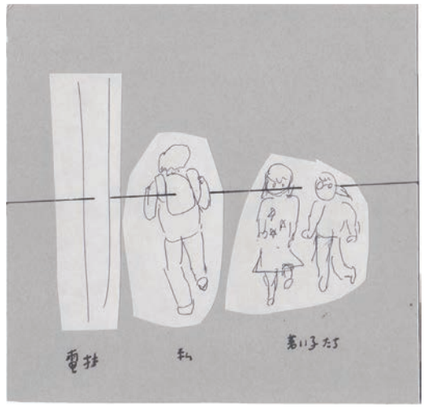
今住んでいるところに引っ越して間もなく、ポストに一通手紙が入ってきた。下の階の住人からだった。「ここは公共住宅です。足音がうるさいので夜は静かにしてください。」という内容である。最近床下から竹槍で突いたようなドンッという音がしていたのはこのためだった。私はこれまで、夜というのは自分のための時間だと思っていたが違った。夜はみんなの時間だったのだ。息をひそめ、お夜さまに時間を預けて、朝が来るのを待たなければならない。そのための儀式の記録。

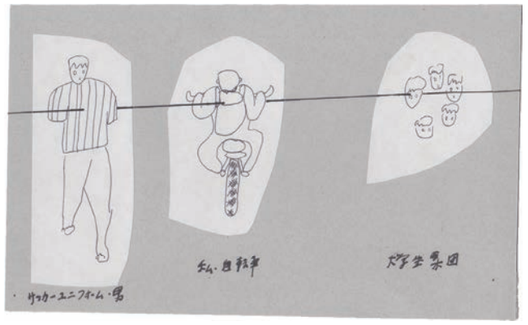
《お夜さまに預けます》
映像・インスタレーション　2016

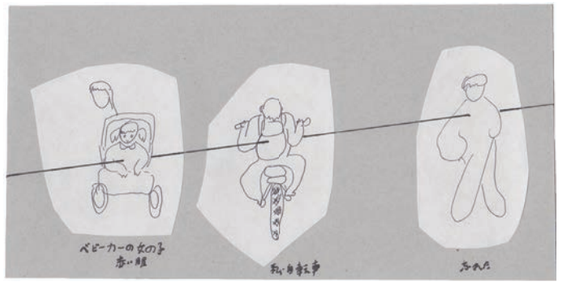


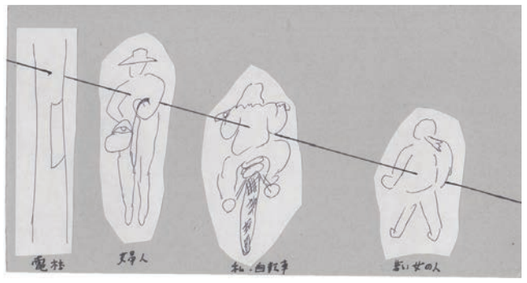
《すれ違い録》
映像・ドローイング　2017

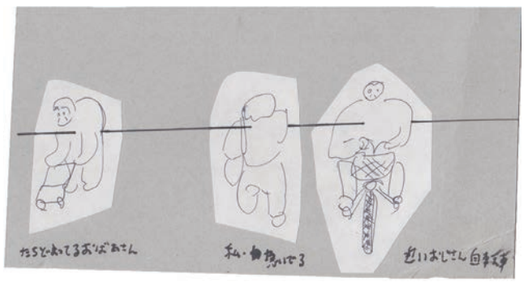
普段道を歩いているとき、特に混み入った道でもないのに私をはさんで両脇の知らない誰かと同時にすれ違うことがある。その度に私は、この世界のどこかで、何かが変化するスイッチが押されたのではないかと空想する。











見知ら人たちとのすれ違いについて

私は毎日、道を歩いたり、自転車に乗って学校へ行ったりする。

道を通ると、他にも人が歩いている。だいたいみんな知らない人だ。車や自転車で道を通る人もいる。

私は私の歩幅や速さで歩いているので、他の人を追い抜いたり追い抜かれたりするし、向こうからやってくる人もいる。そういう人は大抵私の横を何事もなく通り過ぎる。

ここでいう「私」と「他の人」はほぼ同じ存在だ。みんなそのような状況の中、道を歩いている。そんな私たちの何事もない通り過ぎが、たまに重なることがある。私と他の人の一人との間で起こるのではなく、私と他の人と、私と別の他の人と、他の人と別の人の間でそれぞれ起こっている。

それはひとつのまとまり、まっすぐな線となって、道に突然現れる。

なぜここ、この場所・この地点でこのタイミングで、私たちは一直線上に並んだのだろうか。

私・追い越す人・向こうからやってくる人、自転車ですり抜ける人、車でゆっくり移動してる人・なぜか立ち止まっている人。

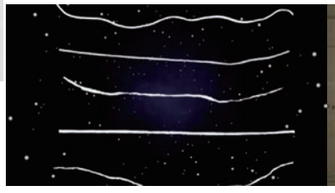
複数の私たちは確実に一つの線として結ばれた。そのまま生きていれば関わりも、関わる理由も持たない私たちが一瞬だけつながった。そしてその瞬間はもう二度とやって来ない。

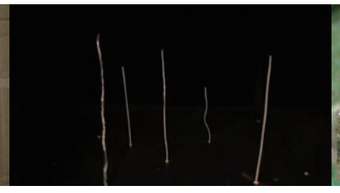
《幻の世界 # しらす》
立体　2014

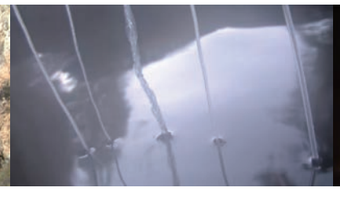
メガネをかけずに外を歩くと、大事な何かを見逃してしまうこともあるけど、見えない何かがみえることもある。

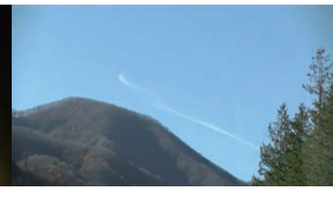
《線 - 譚》
映像（8min22sec）・インスタレーション　2015

春雨、ビーフン、葛切り、糸寒天、マロニー。どれも似たようなものたち（と私が思ってる乾麺類）である。それぞれ、元になっている材料や使われ方、食べられている地域が異なるのに、いまいち違いが分からないものたち。これらの違いを調べているうちに、「異なる背景を背負った春雨たちが、自分たちの秘密を解き明かすために旅に出る」という物語を想像するようになった。







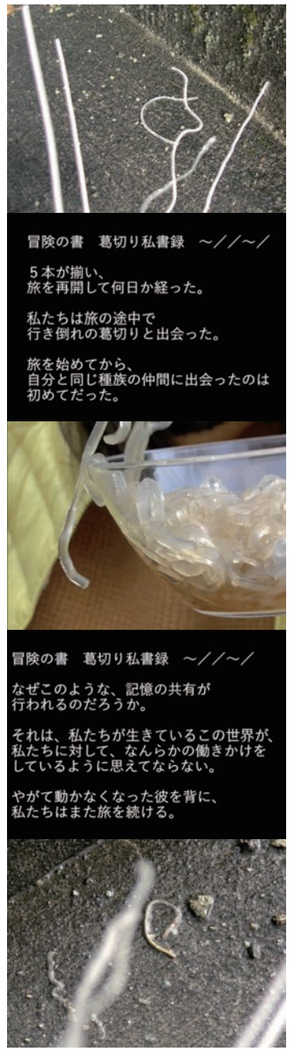


物語のあらすじ

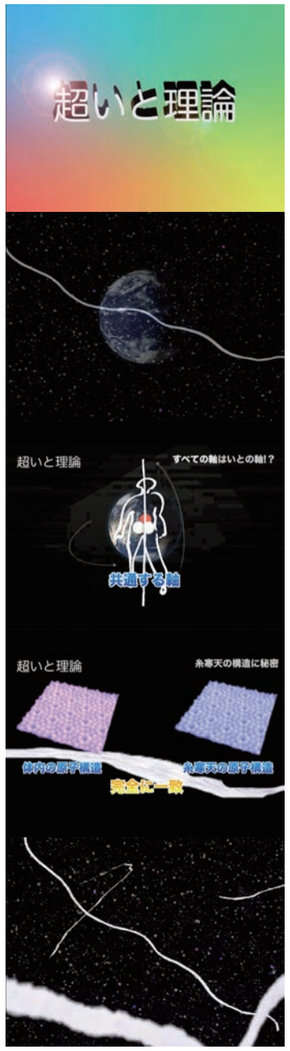
ある世界に春雨、ビーフン、糸寒天、マロニー、葛切りたちが暮らしている村があり、平和に仲良く暮らしていた。ある日、彼らは、自分たちがなぜ存在するのか、なぜそれぞれが微妙に違う姿をしていることの理由が分かるかもしれない場所があるということを知る。このままでも暮らしてはいけるが、自分たちが存在することの理由を、知らずに今後過ごしていくことはできないと彼らは考え、その秘密の分かるかもしれない場所に行くために旅をする。
道中、ビーフンが”手”という謎の物体に折られるが、フォーという仙人に出会って助けてもらったり、他の麺類との出会いがあった。ゴールである山の頂上へ向かう途中の森で、周りの自然と自分たちの姿が似ているように思えてきたり、様々な経験を通すことで、それぞれの意識の共有をしていき、自分たちが本当は人間世界で食べられるために存在していることを思い出す。

《malony’s dream》

《冒険の書 葛切り私書録》



《超いと理論》



《麻婆春雨と中華ビーフン》

《序章》
立体　2012

《アマゾン》
映像（4min45sec） 2014

ネットショッピングをして、商品が大きなダンボールで届いた。過剰包装だった。
中身を取り出すと、大きくて邪魔なダンボールが残った。すぐに捨てることも出来ない。
ダンボールの端には折り込むための切り込みが入っていて、それが何だが手足に見えた。持ってみると、私の身長のちょうど良い位置にダンボール端が来るので、ダンボールを歩かせることにした。ダンボールはどうやって歩くのか。この大きさのダンボールだから私はこのダンボールを歩かせようと思ったし、ダンボールも私がいることで歩くことが出来る。

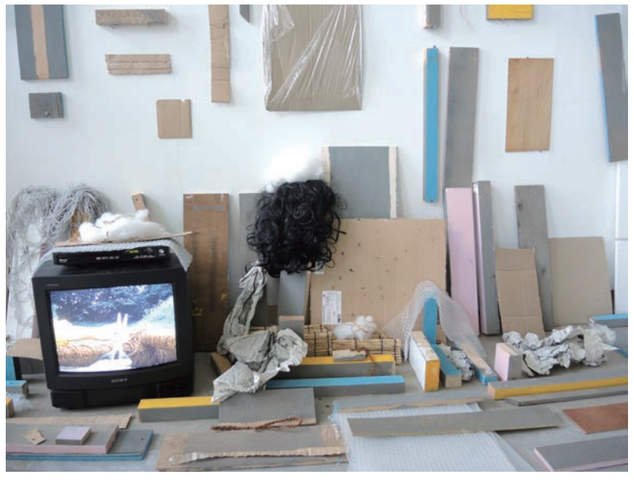
《カレーワイプ》
映像（6min13sec） 2014

カレーが作られていく様子を、カレーの材料たちがワイプ（バラエティ番組とかでよくあるVTRを流している間にスタジオの様子も一緒に映すもの）で淡々と見ている。

《しかと》
写真　2010

自分の力では操れないものと心を通わせたいと強く思い、奈良公園にいる鹿たちと
一緒にベストショットを撮ろうとする記録。

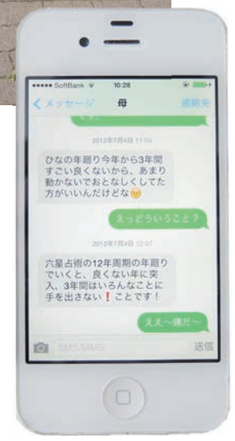
理想図。予定ではこんな感じで撮れるはずだった。



《破壊の昼下がり》
映像（14min）・インスタレーション　2015

占いに縛られ生きる自分自身を破壊するため、作っておいた＂大殺界＂という文字のオブジェをすぐ捨てられるまでに解体する行為の記録。占いという曖昧なものを、物理的に壊そうとしていく試み。

大殺界に寄せて　2015.5



大学に入学して数ヶ月が過ぎたある日のこと、突然、母親に

・私が今年から３年間大殺界であること
・そのためできるだけ新しいことをしないようにしてほしい

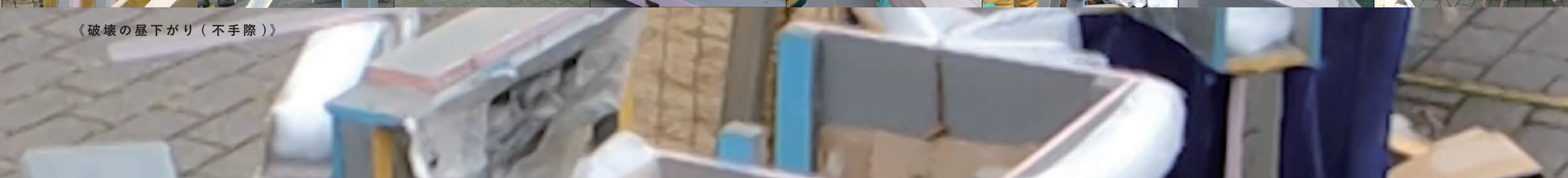
というようなことを言われた。しかし大学という環境に入り生活する以上、新しいことを迎えずに生きることは不可能だろう。私は気になりつつも新しいことをたくさん学びながら３年間過ごした。結果、精神的に落ち込んだりもしたが、特に怪我も病気もなく、私は元気です。それどころか良い人間関係にも恵まれ、制作もなんとか頑張っている。贅沢はしないがひどく貧乏な訳でもない。

母曰く、大殺界の３年間を過ぎれば運気は上がり調子らしい。つまり今、大学４年の現在なのだが、今度は逆に全くそんな気がしない。それどころか制作も卒制で悩んでるし、最近存在感が薄い気がするし、毎日を若干憂鬱に過ごしてる。占いか風水か知らないがなんなのだ。（占いは六星占術。私自身は詳しく知らなかった）しかし、もともと運勢が良かろうが悪かろうが、その立場によりいろいろと努力すべきだったのだ。おみくじだって毎朝のニュース番組の占いだってそのようなものだ。行動を起こさないことには何も変わらない。
という訳で、知らぬ間に占いに縛られ生きる自分自身を壊すための制作をしたい。今年の７月で、母に言われてからちょうど３年になる。

学校の課題で作った作品で、納得のいかないものがあった。講評後、勢いに任せて作品を壊していたが、きちんと設計したものではなかったので、分解するのに時間がかかった。その時、作品を作ることは時間がかかるが、作品を捨てるために壊すことも、同じように時間がかかることなのだということに気づいた。

《破壊の昼下がり（困惑）》

《破壊の昼下がり（不手際）》



渋谷で行った、鳥取と島根の県境を書いてもらうというアンケートの記録と、
鳥取と島根の間の町米子で行った県境に対する様々なアクション。

《あいだにはなにが》　二家本帆菜＋長田雛子
映像、ビデオインスタレーション　2012

境目とはなんなのだろうか。
同じ陸続きの土地が、線を引いて分けられている。
それでもその県境は時に曖昧なものとして私たちの目に映る。
何が境界を形作っているのか。
土地と土地、そのあいだにあるものを探して、
境目を自分たちの体で辿った旅の記録。

ー電車の中で、境目の上を超えてみる

ー境目をまたいで、反復横跳びをしてみる

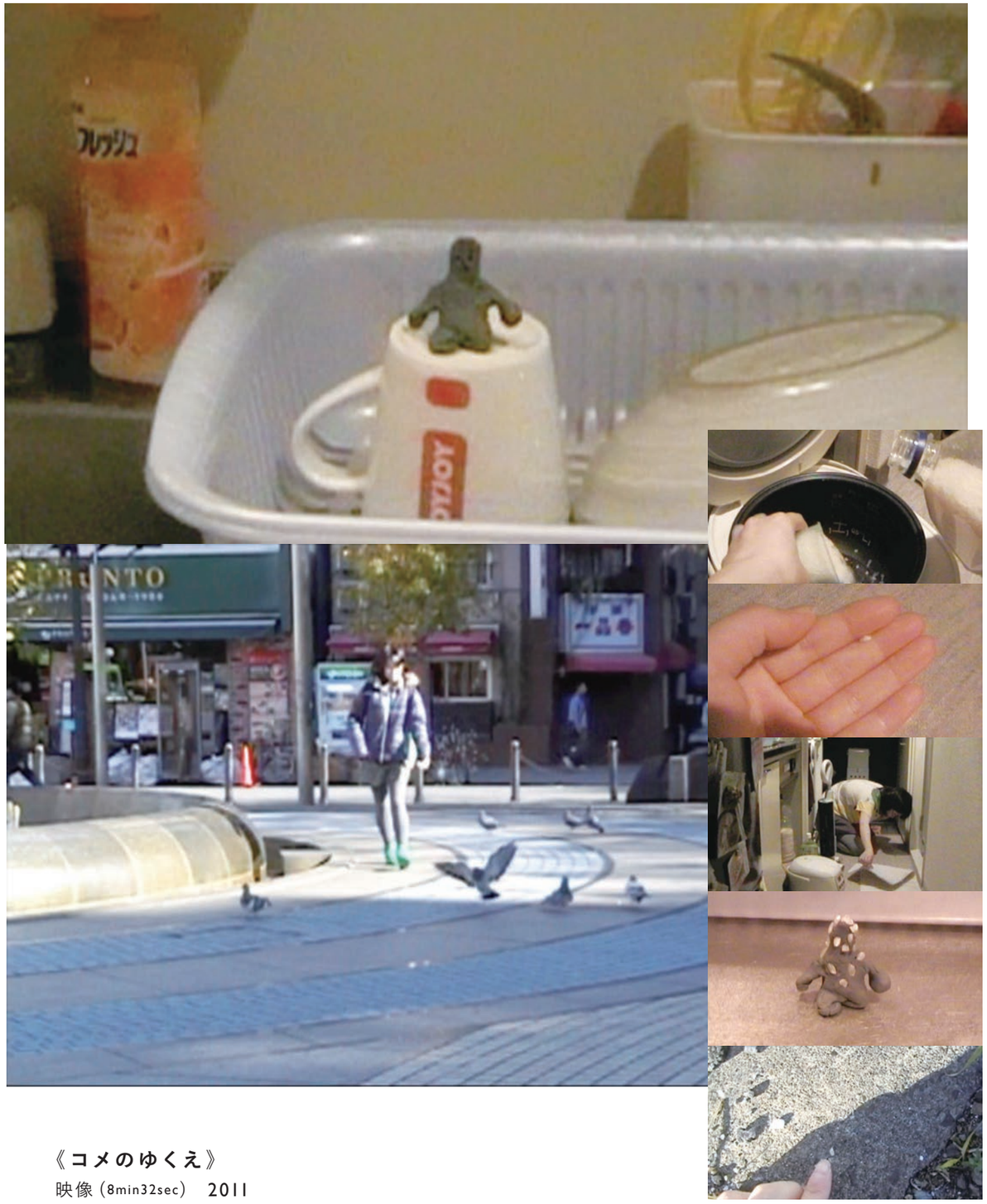
ー境目を挟んだあちらとこちらで、海水を交換してみる

《ゴリラのバナナ旅行》
立体、インスタレーション　2012

ゴリラが旅をするときは、バナナにまたがってどこまでも飛んでいくようなイメージ。
バナナが痛みかけてきたら、いったん休憩。
雪国に行ったゴリラは白くなる。

《贖罪（ごみのてるてる）》
立体作品　2009

家で持て余しているレジ袋の数だけ、私はゴミを拾ってはてるてる坊主を作る。道ばたには、何年前のゴミか？と思うような劣化したものも落ちていた。それはずっとそこにあった。
わたしはただ境界を作るだけだ。「展示」することでゴミの存在を浮き彫りにする。
一定時間展示をした後、ゴミ収集の時間に回収しようと思っていたごみのてるてるは、私がやる前に地域住民の手によって捨てられていた。



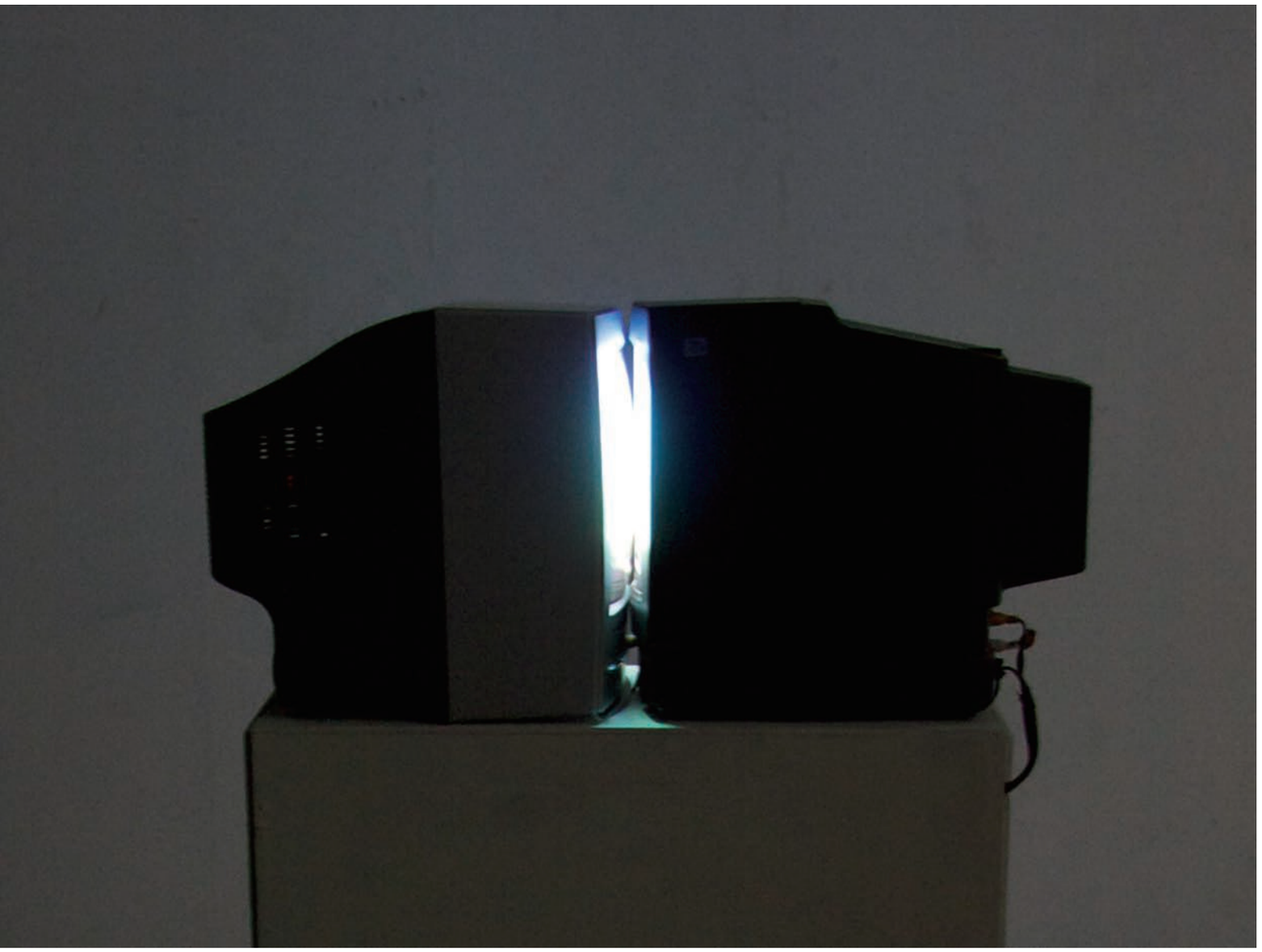
《コメのゆくえ》
映像（8min32sec） 2011
ちょっとした出来事のせいで食べる米として選ばれなかった米、ゴミくず同様となってしまった米の粒たちに、違う形での価値を与えたいと思い、家の中や外にでて落ちている米を探しに行き、役目を与えるまでのプロセス。
姿かたちは同じように見えるが、それぞれ全く違う運命をたどるものたち。ここでは、その結末を私自身で操作する。

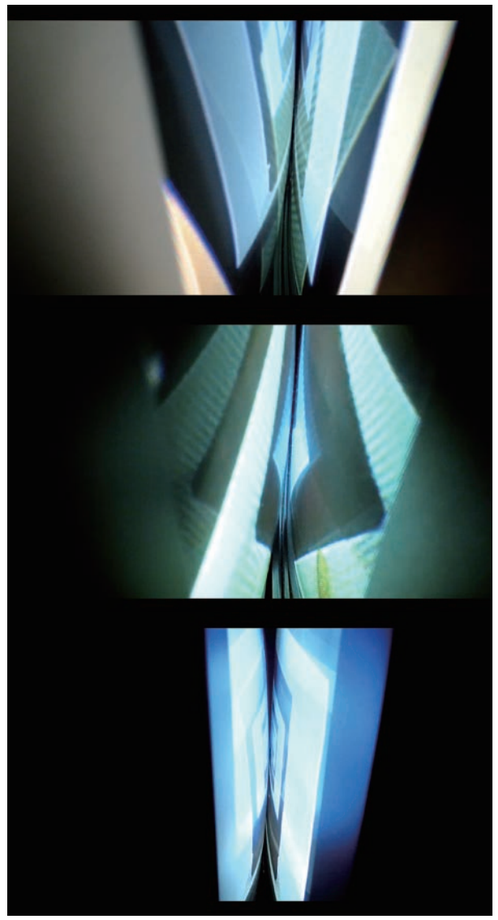
《くうき》
立体 2014

エアタバコ用のただの空の箱。

《天井下のディスタンス》
インスタレーション　2014

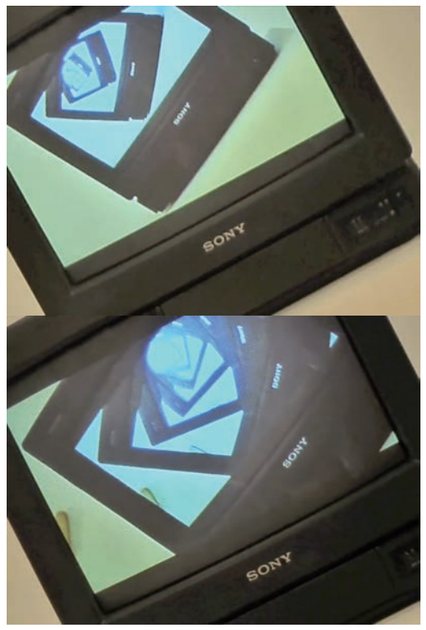
死んでしまいたいような悲しい出来事も、本当は誰もが抱えていて、そういう世界において
あなたは一人ではない。希望の光は案外すぐ近くにある。

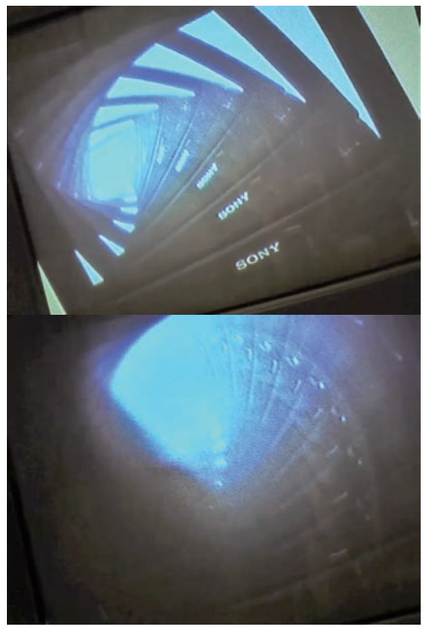


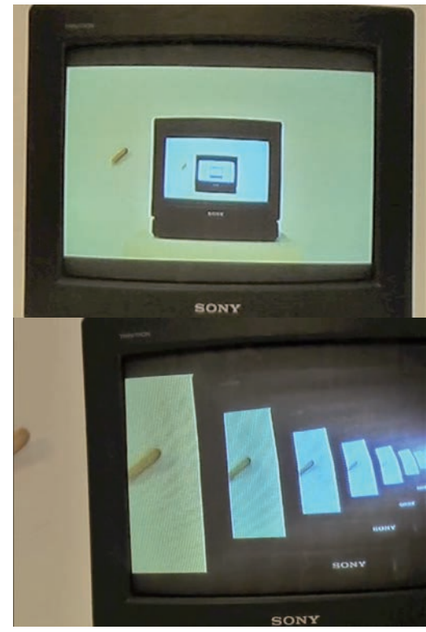


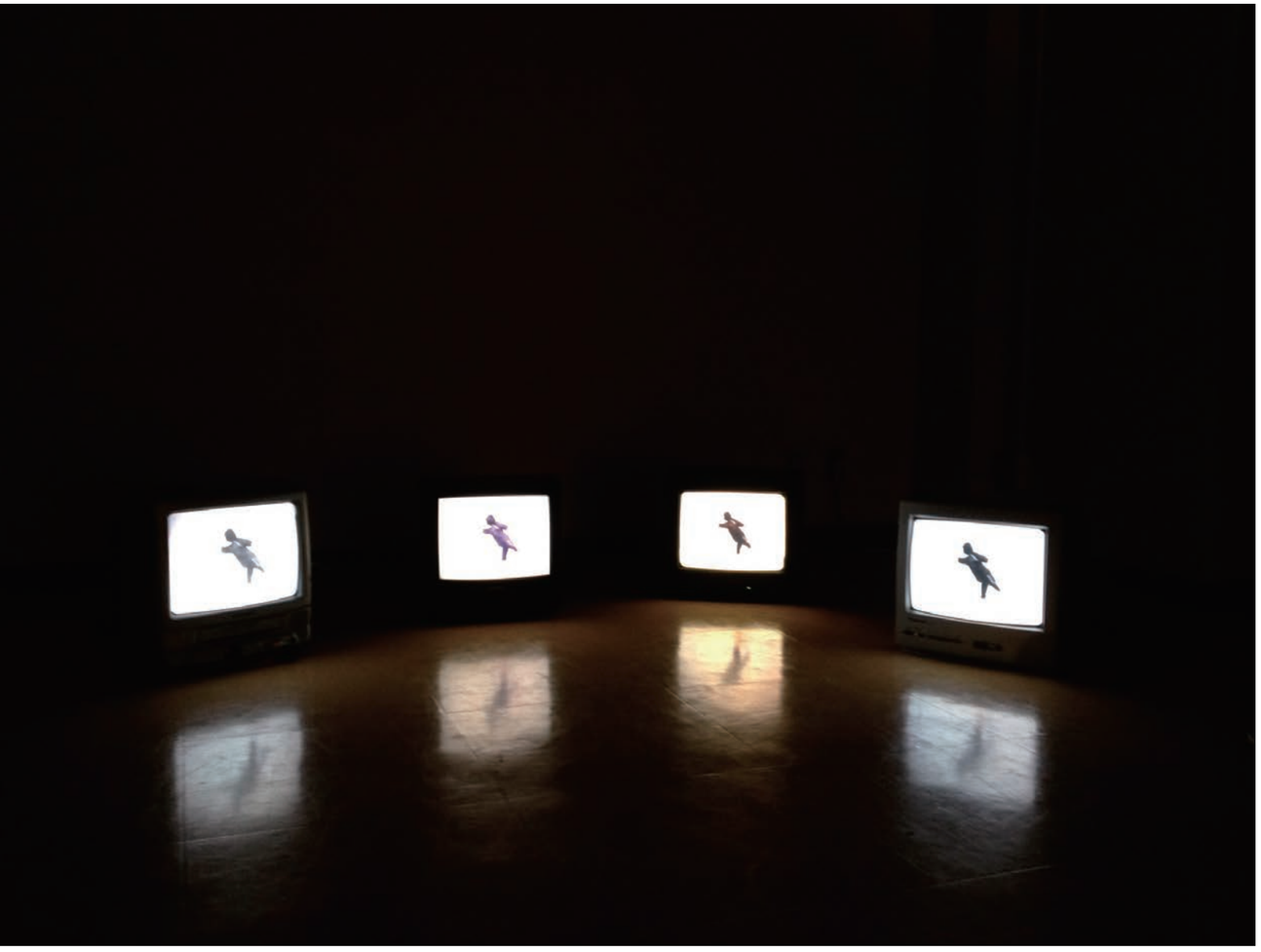
《さがしものをさがして》
映像　2013

アナログテレビを向かい合わせた時にできる凸面の隙間から映像を鑑賞する。
見えにくくなっている画面を、それでも覗き込むという身体性を作品の一部として取り込みたかった。
映像は、アナログテレビ２台を向かい合わせたときに、テレビの内部世界の奥行き（アナログテレビの幅）が広がっていく様を想像する視点で制作した。テレビの枠が合わせ鏡のように何十にも続き、その光景を基軸に、いつの間にか異物が映り込んでいる。









《額縁》
ビデオインスタレーション　2013

ブラウン管の中には何が詰まっているのか。あの光る表面を作り出すために、あれだけの奥行き。
見た目が興味深いことを " 絵的に面白い " と言うけど、情報を得るための用途として使われることが少なくなりつつある今、ブラウン管は " 絵的なもの " を映すための装置になっているように思う。あの奥行きの果てにあるものも、映るかもしれない。

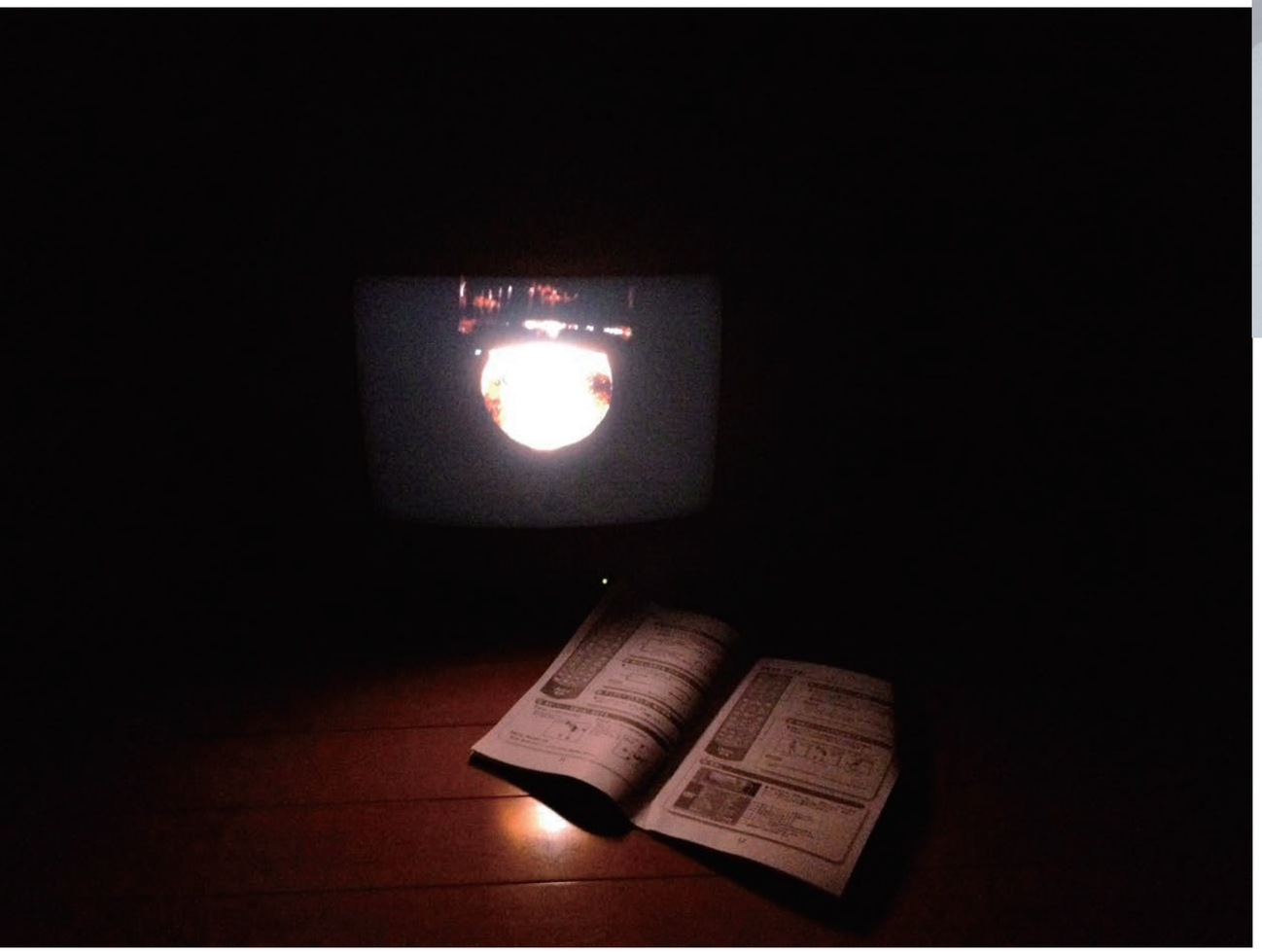
同じようで、違う映像を流す。

一つのポーズを何分間もし続けようとする映像。

一つのポーズをしている静止画。

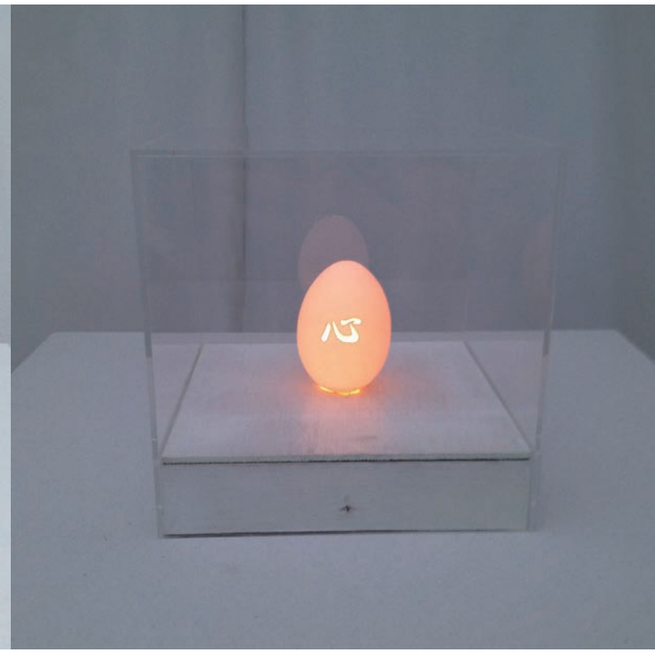
0.1 秒の動きの繰り返しの映像。

静止画を手持ちで撮る。



《光あれ》
ビデオインスタレーション　2013

ブラウン管を照明としてあつかう。



《卵の心》
立体　2014

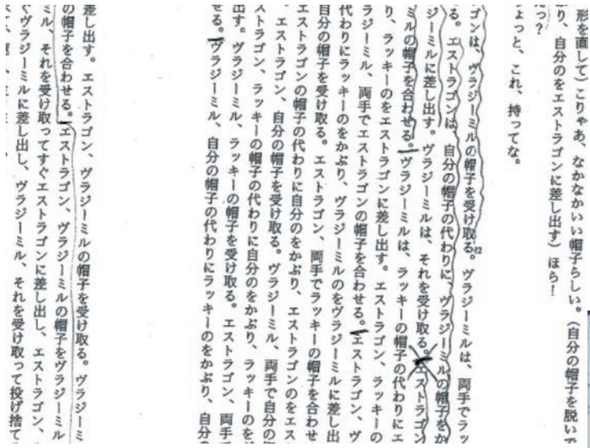
レーザーカッターにより卵の殻に ” 心 ” という文字をくり抜き、
小さなランプシェードを作る。

《瞳は宇宙》
映像　2014

少女漫画に出てくる少女の複雑な瞳には、人の顔が描かれているのではないかと思った。現実の人間の顔写真でそれを作って確かめる。

《爆発のドローイン》
映像、ティッシュ　2014

くしゃみをするとき、いつも鼻水も同時に出るので、いつもティッシュをくしゃみに間に合うように鼻元に持ってくるのが日常なのだが、鼻息の勢いがありすぎてティッシュに穴が空くことがある。ごくまれに、二つの穴が綺麗に空く。
様々な条件が重なって一つのドローイングが生まれる。



形を直して）こりゃあ、なかなかいい帽子らしい。（自分の帽子を脱いで
り、自分のをエストラゴンに差し出す）ほら！
っ？
ょっと、これ、持ってな。

ゴンは、ヴラジーミルの帽子を受け取る。ヴラジーミルは、両手でラッ
る。エストラゴンは、自分の帽子の代わりに、ヴラジーミルの帽子をか
ジーミルに差し出す。ヴラジーミルは、それを受け取る。エストラゴン
ミルの帽子を合わせる。ヴラジーミルは、ラッキーの帽子の代わりにエ
り、ラッキーのをエストラゴンに差し出す。エストラゴン、ラッキーの
ラジーミル、両手でエストラゴンの帽子を合わせる。エストラゴン、ヴ
代わりにラッキーのをかぶり、ヴラジーミルのをヴラジーミルに差し出
自分の帽子を受け取る。エストラゴン、両手でラッキーの帽子を合わせ
エストラゴンの帽子の代わりに自分のをかぶり、エストラゴンのをエス
エストラゴン、自分の帽子を受け取る。ヴラジーミル、両手で自分の
ストラゴン、ラッキーの帽子の代わりに自分のをかぶり、ラッキーのを
出す。ヴラジーミル、ラッキーの帽子を受け取る。エストラゴン、両手
せる。ヴラジーミル、自分の帽子の代わりにラッキーのをかぶり、自分

差し出す。エストラゴン、ヴラジーミルの帽子を受け取る。ヴラジーミ
の帽子を合わせる。エストラゴン、ヴラジーミルの帽子をヴラジーミル
ミル、それを受け取ってすぐエストラゴンに差し出し、エストラゴン、
ぐヴラジーミルに差し出し、ヴラジーミル、それを受け取って投げ捨て

《それでも与えられた言葉を信じて》
映像（5min42sec）　2012

戯曲「ゴドーを待ちながら」の中に、登場人物の二人が３つの帽子を交換する場面がある。不条理な会話が延々と続いていく中で、無言で帽子を交換しているであろうその場面が、読んでいてとても記憶に残った。文章を読んでいるだけだったので、会話ではなく続いていく文字の羅列から、再現したらどういう感じなのだろうということが気になり、友人の一人と一緒にその過程を記録した。２年前に。
ここで言う”過程”というのは、その文章を理解し、練習もして本番をやってみるという一連の流れのことである。過程から映すことで、私たちがどういう風にこの戯曲のこの場面に折り合いをつけていくのかを記録したかった。
あれから２年が経った。同じ友人とまた同じことをやってみる。二人とも大概のことを忘れていたので、またはじめからやり直しだったが、読み取りの試行錯誤を繰り返した「感じ」はよく覚えていた。そして全く同じ行為の繰り返しにはならない。全ては、ひとかたまりの戯曲の一節から始まっていて、その文章だけを頼りに、動き、様々なことを試していく。

《武器の出現》
映像　2013
45sec
ラップの芯を影にかざすと、角度によっては手の中に収まり芯の形が見えなくなる。
消して、現してを繰り返すと、影の中の私は、武器を手に入れた人のように見える。
その練習。

《一日一絵》
ドローイング　2009-2012

らくがきをするときは、何も考えていないようでちょっと考えている不思議な感覚がある。

1993 年頃　写真の中心に祖母、母、私

犬っこまつり

私の地元の秋田県湯沢市では、毎年２月に「犬っこまつり」という冬の祭りが行われる。
雪で犬の雪像やお堂を造る祭りである。
祭りというのは伝統で、環境や状況によって形式を変えることがありながらも、もうずっと続いている。

どこまでも、雪

2011 年の４月に湯沢に帰ったとき、倒壊している家をちらほら見かけた。母親に「やっぱり震災の影響で?」と聞いたら、そうではなく、「積雪量が今年はすごかったから雪下ろしが間に合わなくて潰れる家がたくさんあったんだよね」とのことで、それらが震災以前の風景であることに衝撃を受けた。「屋根の雪下ろし」は、ここが雪国である以上、必ず定期的にやっていかなければいけないことで、でもその雪下ろしをしたがために亡くなられる人が毎年、結構いる。やらなかったら家が潰れてしまう。必ずしなくてはいけないことが、死と隣り合わせの作業なのだと気づいて、私は屋根の雪下ろしに興味を持ちはじめた。

翌年の１月にまた帰って来たとき、雪下ろしを代行で引き受けてる組合の人に頼んで、雪下ろしの様子を私も屋根に上って撮影させてもらった。屋根の上は思っていたよりもずっと滑りやすく、掴まるところも少ないので一回転んだらそのまま雪ごと簡単に落ちていくな、ということが実感できた。あまりにも恐くて動きながらの撮影がほとんど出来なかった。

今回はその恐怖を実感出来ただけでも良かったなと思ったけど、家の一番上の屋根に上って湯沢の街を見渡したとき、まだ雪下ろしをしなくてはいけない屋根がたくさんあった。そのとき私は、これからも雪下ろしをしていく全ての人たちの安全を願う犬っこの像を、屋根の上に、作りたいと思った。もともと犬っこまつりは安全祈願をするお祭りだが、昔の犬っこが家内安全のためのお祭りであるならば、今は雪下ろしで家外安全というように。

《屋根の上の犬っこ》
雪像（W80cm×D120cm×H110cm） 2012

私はそれを実行した。雪が多く積もっている屋根の上は案外雪が崩れにくく、
作業をしているうちに屋根上だという恐怖は薄らいでいった。ちょうど雪下ろし
をしていた隣の家のおじさんと屋根の上でおしゃべりをした。
まつりの当日だったので、会場へ犬っこを見に行ったが、記憶していたものより
もそれぞれの犬っこの姿は個性的で、私の犬っこの方が標準型のように見えた。

雪下ろしをする全ての人たちのための、屋根の上のシンボル。

《雪かきA（降ろす）》
映像（8min6sec） 2012

《雪かきB（泳ぐ）》
映像（3min5sec） 2012

2018.10　長田 雛子